

五輪開催に反対する

かねてからオリンピックという「祝祭」、イベントに疑問を抱いてきた。今夏の東京五輪・パラリンピックは、どう考えても開催を中止すべきである。コロナ危機により医療が逼迫し、都民や国民の命が危ぶまれる状況下で、あくまで五輪を開催することが信じられない。まさに「命より五輪」なのか。世界中がコロナ禍で揺れ動くなかで、五輪精神に謳う公平な競技などできるだろうか。あくまで五輪という「祝祭」を続けたいなら、IOCは中止を選択すべきではないか。二つの記事を抜粋して紹介する。

朝日 22 日社説から

「普通はない」はずのパンデミック下での五輪の開催を強行し、含みを残しながらも、専門家が「望ましい」とする無観客方式を採ることもしない。このまま突き進めば「コロナに打ち勝った証し」どころか、科学的知見を踏みにじる「独善と暴走の象徴」になりにかねない。とても納得できない。

社説は先月、今夏の開催中止の決断を菅首相に求めた。その主張に変わりはないが、あくまでも大会を開くというのなら、その中でリスクの最小化に向けて採り得る限りの手段を採るのが為政者の責務だ。分科会の尾身茂会長ら専門家有志が 18 日に公表した提言を真摯に読めば、「有観客、1 万人」などという話にはならないはずだ。

どんな状況になればいかなる措置をとるのか、わかりやすい判断基準をすみやかに国民に、いや世界に示す必要と責任がある。五輪への影響を考えて宣言や重点措置の発出・解除が左右されるようなことがあってはならない。これもまた、改めて言うまでもない当然の理である。

大阪日日 24 日「金井啓子の現代進行形」から

コロナ禍がおさまったとは全く言えず、いつか五輪の中止が発表されると願い続け、その考えを表明してきた私としては信じられない思いである。五輪の最中に緊急事態宣言を出す可能性にすら首相が言及している国で、なぜ開催を強行せねばならないのか納得できない。

最近では、無観客ならばよい、観客を入れるにしても人数を制限すればよいと、あくまでも開催が前提となっているが、なぜ中止の選択肢がないのか。万全の対策をすればよいとの声も聞くが、そもそも「万全の対策」などはこの世に存在しない。仮に存在すれば、コロナ禍がここまで長引くことはなかっただろう。1 万 4517 人（6 月 22 日現在、クルーズ船を含む）の人たちは誰ひとり死なずに済んだだろう。私はここで諦めて恐ろしい結果を招くことは避けたいので、いま一度、反対の声を上げておきたい。正直なところ、これほど強引な五輪開催推進に向けた動きを目にして、無力感にさいなまれてはいる。だが、ここで何も言わずにいて悔いを残したくない。また、たとえ「蠅螂の斧」であっても数が集まればなにがしかの効果を生むとも信じたい。

(2021 年 6 月 25 日)